

# ZEPHYROS

1998年  
第4号



国立西洋美術館ニュース ゼフュロス  
The National Museum of Western Art, Tokyo

# イタリアの光－クロード・ロランと理想風景

## 目 次

- イタリアの光－クロード・ロランと理想風景 ……2  
主任研究官 幸福 輝  
ゴヤー版画にみる時代と独創 .....4  
学芸課長 雪山 行二

- 新収蔵作品 .....5  
本館の常設展示 .....5  
'99年度展覧会スケジュール .....5  
イタリア中部地震文化修復支援募金について .....6  
財団インフォメーション .....7  
ゼフェロスギャラリー

\*今回はエッセイ「上野の杜」発はお休みします。

中世末期に端を発する西洋の風景画は、1500年頃、アルプスの南北で新たな展開を見せます。アントウェルペンで活動をしたパティニールは、初期フランドル絵画の精緻な背景描写を基礎にしながらも、峻険たる奇岩や蛇行する河川などから構成される非現実性の強い俯瞰構図の風景描写を生み出しました。自然観照からというよりも、宗教的、あるいは、博物学的理念から生まれたこの風景は、特定の場所の景観ではなく、世界そのものの原初的風景の描写という意味で「世界風景」と呼ばれています。「世界風景」はやがてより自然な風景描写にとって代わることになりますが、ブリューゲルやルーベンスなどの作品にもこの伝統は息づいており、一見、対極に位置するように見える17世紀オランダの写実的風景画にも少なからぬ影響を与えました。

アントウェルペンと並んで風景画の歴史に決定的な影響を及ぼしたのは、ヴェネツィアです。とりわけジョルジョーネの周辺ではアルカディア文学などの流行を背景に、古代を連想させる場面設定の中に牧歌性の強い風景描写が好んで描かされました。ティツィアーノによって一層明確な形を与えられたこの風景画の伝統は、16世紀の終わり頃、カラッチ、ドメニキーノなどボローニャ派の画家たちによって再び大きく発展することになります。

こうしたイタリアの風景描写にたいしては「理想風景」という名が与えられ、「世界風景」から「写実的風景」へと展開していったネーデルラントの風景画とともにヨーロッパの風景画の大きな底流となりました。そして、この絵画伝統を完成に導き、同時に、「理想風景」を汎ヨーロッパ的現象にまで高めた



《ペルセウスと珊瑚の出現》  
個人蔵

# クロード・ロランと理想風景

会期: 1998年9月15日(火・祝)~12月6日(日)

主催: 国立西洋美術館／朝日新聞社

画家がクロード・ロランでした。フランスのロレーヌ地方出身であるとはいえ、その生涯のほとんどをローマで過ごしたクロード・ロランは実質的には「ローマの画家」であり、17世紀ローマの文化と不可分に結びついています。けれども、クロードを「ローマの画家」と定義してしまっては大きな誤解を招くことになります。当時のローマは多数の北方画家の活動拠点でもあり、とりわけ、風景画の分野においてはこうした北方画家が重要な位置をしめていたからです。クロード・ロランもいわばそうした北方の風景画家のひとりとして出発したのであり、少なくとも、初期から中期にかけてのクロードには北方の絵画伝統が息づいていました。

このように、クロード・ロランの作品には、いわば、1500年頃にアルプスの南北で開花した西洋風景画のふたつの大きな潮流が総合されているといっても過言ではありません。クロードを「西洋風景画の頂点に立つ画家」と形容することも決して単なる誇張ではないのです。彼の影響はローマで活動していた各国の画家たちによってそれぞれの国に伝えられ、間接的影響まで含めれば、「クロード的風景」は17・18世紀のヨーロッパの風景画の代名詞にさえなったのです。フランスでもイタリアでも彼の影響は決定的なものがありましたし、写実的風景が主流だったオランダにおいてさえも彼の影響を無視することはできません。しかしながら、クロード・ロランの最も強い影響を受けたのは「グラ

ンド・ツア」でイタリア文化を自国に伝えることに熱中した18世紀のイギリスでした。クロード・ロランの最も熱烈な信奉者がイギリス最大の風景画家タナーであったことは決して偶然ではなかったのです。

この展覧会はヨーロッパで最も重要な風景画家クロード・ロランの作品を回顧し、その作品の魅力を再確認していただくとともに、クロードの作品を通じてさまざまに交錯するヨーロッパ風景画の諸相をも認識していただこうとするもので、クロードの作品約80点(油彩画40点／素描版画40点)と理想風景の系譜に連なる画家たちの作品約40点が展示されます。

(主任研究官 幸福 輝)



《ラ・クレシェンツアの眺め》  
メトロポリタン美術館



《踊るサテュロスとニンフのいる風景》  
トリード美術館

# ゴヤー版画にみる時代と独創

会期: 1999年1月12日(火)~3月7日(日)

主催: 国立西洋美術館／読売新聞社／(財) 西洋美術振興財団

スペインの生んだ巨匠フランシスコ・ゴヤ（1746-1828）は、画家として有名であるばかりでなく、デューラー、レンブラントと肩を並べる西洋美術史上最高の版画家の一人と見なされています。技法という点から見ても、デューラーとレンブラントがそれぞれエンゲルヴィングとエッチングの大成者であったように、ゴヤはアクアティントとリトグラフの分野で不滅の足跡を残しました。ゴヤにとって版画は油彩画にもまして自由に想像力を發揮することのできた分野であり、彼の芸術の本質はむしろ版画にいっそう明確に認められるといっても過言ではありません。

ゴヤは生涯に約270点の版画を制作しましたが、そのなかでも『ロス・カブリヨス(気まぐれ)』、『戦争の惨禍』、『闘牛技』、『妄』の4大版画集はよく知られ、わが国においても、当国立西洋美術館をはじめいくつかの美術館がこれらの版画集、もしくはその一部を所蔵しています。また、4大版画集の展覧会はこれまでに何度も開催され、ゴヤの版画芸術の紹介に大きく貢献してきました。しかし、これらの展覧会では、若き日の試行錯誤を示す作品、あるいは発明されてまもないリトグラフ技法に挑戦した最晩年の作品が展示されることはありませんでした。そして何よりも問題なのは、従来の展覧会ではゴヤの版画だけが展示され、それを生み出した土壤、すなわち同時代のスペイン版画や他のヨーロッパ諸国の版画がまったく紹介されなかったことです。

今回の展覧会ではゴヤの版画を、おもに同時代の版画と比較することによって、その独創性と革新性を浮かびあがらせることを意図しています。天才といえど

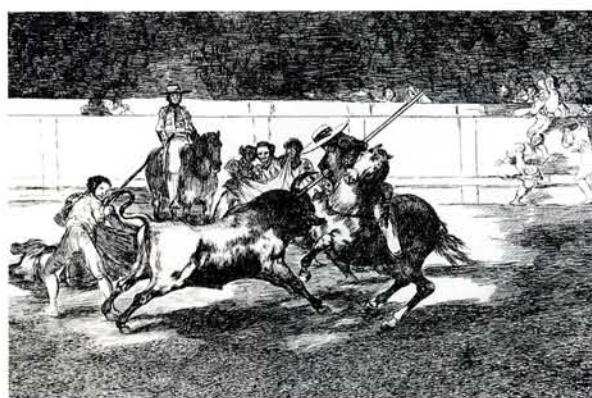


アントニオ・カルニセーロ  
版画集『闘牛のおもな技』(全13枚、1790年発売)より第3図

も「無」から「有」を生み出すことはできません。とりわけゴヤは、自己を取り巻く世界に対して敏感に反応した芸術家でした。彼は他の版画から技法や芸術的価値を学びると同時に、構図やモティーフにおけるインスピレーションの源泉として版画を大いに活用しました。ここでは、主題、構図、モティーフ、技法、用途などの別にゴヤの版画を他の版画と並べて展示することによって、ゴヤが同時代の版画あるいは先行する版画から何を吸収したか、また、それをもとにしていくかに独自の世界を生み出したか、その偉大なる創造力の秘密を探ってみます。

このほか、今回の展覧会で紹介したいものは、ゴヤ自身が目指した刷りです。とくに『戦争の惨禍』と『妄』は、内容が当時の反動体制に対してきわめて批判的であったためか生前には公表されず、初版は没後約35年を経て刊行されました。この1860年代の刷りとわずかに残る生前の試し刷りのあいだには明暗表現の上で大きな相違が認められます。これらの試し刷りを展示することによって、ゴヤが意図したものを忠実に示したいと思います。

ゴヤは、19世紀中葉に德拉クロワやボードレールらフランスのロマン主義者によって見出されて以来、あふれんばかりの想像力の持ち主、即興の天才として知られてきました。しかし、このようなロマン主義的なゴヤ像も今や曲がり角にあります。本展は、「ゴヤ神話」をいったん解体し、その才能を相対的に捉えることによって、ゴヤの独創性と革新性を客観的に示そうとする意欲的な試みなのです。（学芸課長 雪山 行二）



フランシスコ・ゴヤ  
版画集『闘牛技』(全33枚、1816年発売)より第28図《勇敢なレンドーンは、マドリード闘牛場で牡牛を長槍で突きながら、その技の最中に死んだ》

## '97年度新収蔵作品

1997年度、当館では新規に絵画を1点と版画を67点購入しました。そのうちここでは、近代的静物画の誕生を示す素晴らしいファンタン＝ラトゥールの油彩作品《花と果物、ワイン容器のある静物》を紹介することにします。

ファンタン＝ラトゥールの作品を主題の上から見ると、肖像画、静物画、寓意的構想画という三つの分野が大部分を占めていることが分かります。その中でも静物画は、ファンタンがとりわけ情熱を注ぎ、生涯に渡って手掛けた分野です。そして、初夏の果物や花をモティーフにしたこのたびの購入作品は、この画家の数多い静物画の中でも、初期に制作され、高い完成度を持つ点で特筆されるでしょう。背景の暗褐色の空間とテーブルを被う真っ白い食卓布の簡素な対比、白い布の上に更に重ねて置かれた白い陶器皿と白い花の洒落た趣向は、この画家ならではのものです。また、ワイン容器や花瓶、皿などの硬質なイメージに対する、花や果物の触覚的イメージの新鮮な対比は極めて近代的と言えるでしょう。

1860年代には、ファンタンの僚



アンリ・ファンタン＝ラトゥール  
《花と果物、ワイン容器のある静物》  
1865年 油彩・カンヴァス

友とも言うべき、マネ、モネ、ルノワールら多くの画家たちが静物画に手を染めていますが、とりわけマネの作品にはモティーフや構成など多くの点でファンタンの静物画との関連性が見られます。特に、この画面に見られるような、新鮮な時間の感覚を画面に導入したことは、両者に共通した特徴です。19世紀の静物画に鮮やかな足跡を残したファンタンの作品が収蔵されることで、西洋美術館のコレクションには新たな奥行きが生まれたことになります。

## 本館の常設展示

ル・コルビュジエの設計による本館の展示スペースは、天井の高低や照明、順路の点で、きわめて変化に富んでいます。この特性を考え、本館には、さまざまな性格の作品が展示されています。

1階の19世紀ホールでは、従来のロダンに加えてカルボーやマイヨールの近代彫刻12点を見ることができます。また2階のギャラリーには、これまで新館を飾っていたオールド・マスターの絵画が展示されます。オールド・マスターとは、中世末期・ルネサンスからバロックやロココの時代を経て、18世紀末頃までに活動した作家を指す言葉です。マリオット・ディ・ナルド、リッソス、ファン・クレーヴ、ヴェロネーゼ、ルーベンス、ロイスダール、リベラ、ティエポロ、ユベール・ロペールなど、ここに展示されるオールド・マスターの作品55点は本来、聖堂や宮殿、邸宅など、時代によって異なる性格をもった空間を飾るために制作されたものです。

9月の新企画展示館の開館によって、本館と新館は常設展示のために用いることが可能となりました。そのため今後は、両館を併せて180点あまりの所蔵作品が常にご覧いただけるようになります。

一ノの《悔悛するマグダラのマリア》、アンドレア・デル・サルトの《聖家族》、ジョルジョーネの《風景中の聖母子》など、通常エルミタージュ美術館の常設展示室を飾っている代表的作品が数多く出品される予定です。また、ふたつの都市の美術がもっていた個性の違いやそれぞれ独自の魅力を、実際の作品を通じて実感できる機会となることでしょう。



ティツィアーノ  
《悔悛するマグダラのマリア》  
©The State Hermitage Museum, Saint Petersburg.

'99展覧会

スケジュール

## フィレンツェとヴェネツィア

—エルミタージュ美術館所蔵イタリア・ルネサンス美術展—

会期：1999年3月20日(土)～6月20日(日)

主催：国立西洋美術館／NHK／NHKプロモーション

この展覧会は、ロシアの誇る大美術館エルミタージュから、イタリア・ルネサンス絵画45点とブロンズ彫刻15点を借用して開催するものです。さらに、国立西洋美術館が所蔵するイタリア・ルネサンス絵画11点を参考出品としてあわせて展示し、合計71点で構成します。出品作はいずれもイタリア・ルネサンス美術の最大の中心地だったふたつの都市、フィレンツェとヴェネツィアで主に15世紀と16世紀に活躍した芸術家たちの作品です。ラファエッロの《聖家族》、ティツィア

# イタリア中部地震文化財修復支援募金について

昨年9月26日にイタリア中部のウンブリア地方とマルケ地方を襲った地震は、人々の生活のみならず、この地域に数多く残る文化遺産に深刻な被害を与えました。とりわけ聖フランチェスコゆかりの地アッシジでは、世界的に有名な壁画群を擁するサン・フランチェスコ聖堂で天井の一部が崩壊し、チマブエやジョット作とされる貴重な天井画が大きな損害を受けました。この崩落で、修道士と文化財調査官の計4人が下敷になつて亡くなるといういたましい悲劇も起きています。

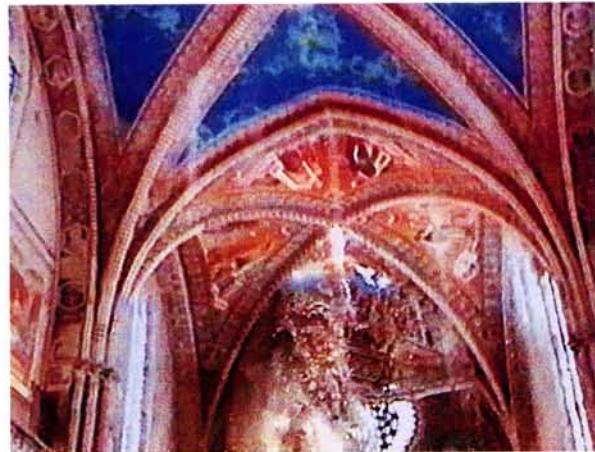
その後イタリア政府は緊急予算を組み、EU諸国に特別融資を依頼し、さまざまな方面で寄付金を募るなどの手段で復旧に全力を傾けています（ちなみにナポリで行なわれたサッカー・ワールドカップのヨーロッパ予選最終戦の収益は全額地震被害の支援金に回されたと聞いています）。この出来事は、歴史や文化の遺産というものは、絶えず人の努力によって維持されないかぎり破壊され消滅する運命にあるという厳しい現実を、あらためて私たちに思い起こさせるものでした。

地震の問題はひとごとではありません。なにか復旧に貢献はできないものかと、小佐野重利東京大学教授、佐々木英也東京芸術大学教授、高階秀爾国立西洋美術館長ら、イタリア文化に縁の深い7人の方々が発起人となり、国立西洋美術館に事務局を置いて「イタリア中部地震文化財修復支援募金」が翌10月に発足しました。全国各地150以上の美術館が募金の呼びかけに協力してくれたのをはじめ（募金箱を置いてくださったところもありました）、新聞各紙やイタリア関係のさまざまな団体が募金活動の紹介に快く応じてくださいました。NHKイタリア語講座テキストの読者欄に紹介記事をのせていただいたり、イタリア料理研究家の渡辺怜子さんが「イタリア出会いの街、思い出のレシピ」という素敵なおとがきの中で募金を呼びかけてくださったのも、こうしたお力添えの一例です。その結果、これまで多くの方々からご支援をいただくことができました。

今年4月3日に被災した当のサン・フランチェスコ修道院聖堂で、瀬木博基在伊日本国大使夫人、高階秀爾国立西洋美術館長、マリオ・セリオ伊文化財省総局長、ジュリオ・ベレットーニ修道院長らが出席して、2月末までに集まった募金を渡すささやかなセレモニ



ばらばらに損壊した壁画の修復作業



サン・フランチェスコ聖堂、天井崩落の瞬間(1997年9月26日)

一が行われました。高階館長からセリオ局長に目録が手渡され、募金活動の報告がなされた時、イタリア側からは大きな驚きの声が沸き上りました。この時の募金総額は約800万円(約1億1千万リラ)です。金額そのものは復旧にかかる膨大な費用に比べればわずかではありますが、遠い日本で、しかも一般の個人の方々による篤志の積み重ねがわずか4か月でこうした金額に達したのに感動したとのことです。

事務局では現在も活動を続けており、すでに3月以降200万円ほどの募金が寄せられています。今後も皆様のご支援を宜しくお願ひいたします。送金方法は、郵便振替(口座名:イタリア中部地震文化財修復支援募金/口座番号:00160-6-410855)、または事務局宛現金書留です。国立西洋美術館にご来館のおりは、本館ロビー内に振替用紙を用意しております。また、同じ場所に募金箱も設置していますのでご利用ください。



修復現場を視察する高階館長と瀬木大使夫人

# 財団インフォメーション

## ◆平成9年度の事業報告

この年度は国立西洋美術館が前年に続き、工事休館だったため、事業計画にしたがい館外展を支援し、他の事業は概ね前年度と同様の支援活動を行いました。

### 1. 展覧会・講演会等の支援

- ①新潟県立近代美術館（会場）と国立西洋美術館の主催による「国立西洋美術館展－愛と生命の響き」の主催体に加わり、図録購入等の支援
- ②東京国立博物館（会場）と国立西洋美術館の主催による「子どものための美術展－ものがたりの森」を後援、企業からの助成金で会場設営費やワークシート、ポスター、チラシ印刷費を支出した他、財団として鑑賞用セルフガイドブックを刊行支援
- ③国立国際美術館（会場）と国立西洋美術館の主催による「開館20周年記念展 素材と表現－国立西洋美術館所蔵作品を中心に」については、国立国際美術館にも支援財団が設立されたこともあり特に支援はしなかったが、当財團グッズを出品販売
- ④「修道士と音楽と写本：フィレンツェ中世ルネサンスの聖歌集挿絵をめぐって」講演会（講師ミシガン大学名誉教授マーヴィン・アイゼンバーグ氏）の開催を支援し、経費面を負担（5月29日 会場 国立西洋美術館会議室）
- ⑤「絵画と彫刻のあいだ：ヤコポ・サンソヴィーノとパラゴーネ」講演会（講師ロンドン大学、ユニヴァーシティカレッジ助教授ブルース・ハウチャー氏）の開催を支援し、経費面を負担（10月20日 会場 国立西洋美術館会議室）

### 2. 資料収集、調査研究等の支援

国立西洋美術館の情報資料の充実に資するため、引き続き外国の図書資料、雑誌を購入寄贈

### 3. 普及広報、職員研修等の支援

国立西洋美術館の休館に伴い、普及広報面の支援はなかつたが、職員研修等に対しては、国内外の学会分担金を始めとする涉外用経費を支援

### 4. 出版物の刊行

「子どものための美術展－ものがたりの森」の鑑賞用セルフガイドブックを印刷刊行

### 5. ミュージアム・ショップの運営

国立西洋美術館内のミュージアム・ショップは引き続き休止したが、財団の商品に対する内外の注文には応じたほか、新潟近美展、国際美展には、出品作品関係グッズ、また東京国立博物館展では、セルフガイドブックの委託販売業務を実施

### 6. 機関誌等の刊行

財団の機関誌を兼ねている国立西洋美術館ニュース「ゼフェュロス」は、10月に第2号、平成10年3月に第3号を発刊

7. その他刊行した印刷物は、国立西洋美術館や東京国立博物館での買い上げ以外に必要部数を国立西洋美術館に寄贈また、展覧会或いは調査研究のため国立西洋美術館を訪れた内外の美術館関係者や学識者などと国立西洋美術館関係者の意見交換交流を支援

◎平成9年度の会計収支状況は次のとおりでした。

収入（前年度繰越を含む）	支出
38,726千円	(事業費) 15,021千円
	(管理費) 7,758千円

## ◆賛助会員について

（平成10年9月1日現在）

賛助会員に変更がありましたので現在の名簿を掲出いたします。

### ●個人会員

鹿島昭一、金平輝子、島崎聰志、高階秀爾、樋口廣太郎、本田 弘

### ●法人会員

アサヒビール、アートよみうり、朝日新聞社、稻元印刷、印象社、鹿島建設、キヤノン販売、サントリー、清水建設、新潮社、精養軒、トップアート、東京新聞、東京スタヂオ、日本通運、野村證券、博報堂、美術出版デザインセンター、便利堂、森ビル、雪印パーラー、読売新聞社

年会費は個人10万円、法人会員1口30万円で、何時からでもご加入いただけます。下記のような特典もございますので、ご加入希望の各位は、先ず応募要項を事務局までご請求ください。

### ■会員優遇内容

1. 国立西洋美術館優待券（個人1枚、法人1口1枚）が発行されます。〈国立美術館・博物館等の展覧会観覧に有効です。〉
2. 賛助会員証を差し上げます。〈国立西洋美術館の展覧会に有効です。〉
3. 国立西洋美術館の展覧会招待状、無料観覧券をお送りします。
4. 国立西洋美術館の所蔵品図録「名作選」や展覧会図録等をお送りします。
5. 国立西洋美術館の主催事業（講演会等）への無料参加ができます。
6. 国立西洋美術館内のミュージアム・ショップの販売品（対象商品）を割り引きいたします。

## ★ミュージアム・ショップからのお知らせ★

国立西洋美術館のリニューアル・オープンとともにミュージアム・ショップも開店しました。

平成10年4月28日から8月16日までは仮設の場所でしたが、9月の全館開館と同時に本格的、恒久的なミュージアム・ショップとして誕生しました。

ブック・コーナーも新設され、西洋美術関係の図書を販売していますのでどうぞご利用ください。

また、当館所蔵作品を扱った、絵はがきやテレホンカードなど従来からのグッズに加え、新商品も増えました。「かさ」「キーホルダー」「フェイス・ペーパー（あぶらとりがみ）」など好評です。

徐々に新アイテムを企画し、ショップの充実をはかっていく予定ですので、ご期待ください。

### 編集後記

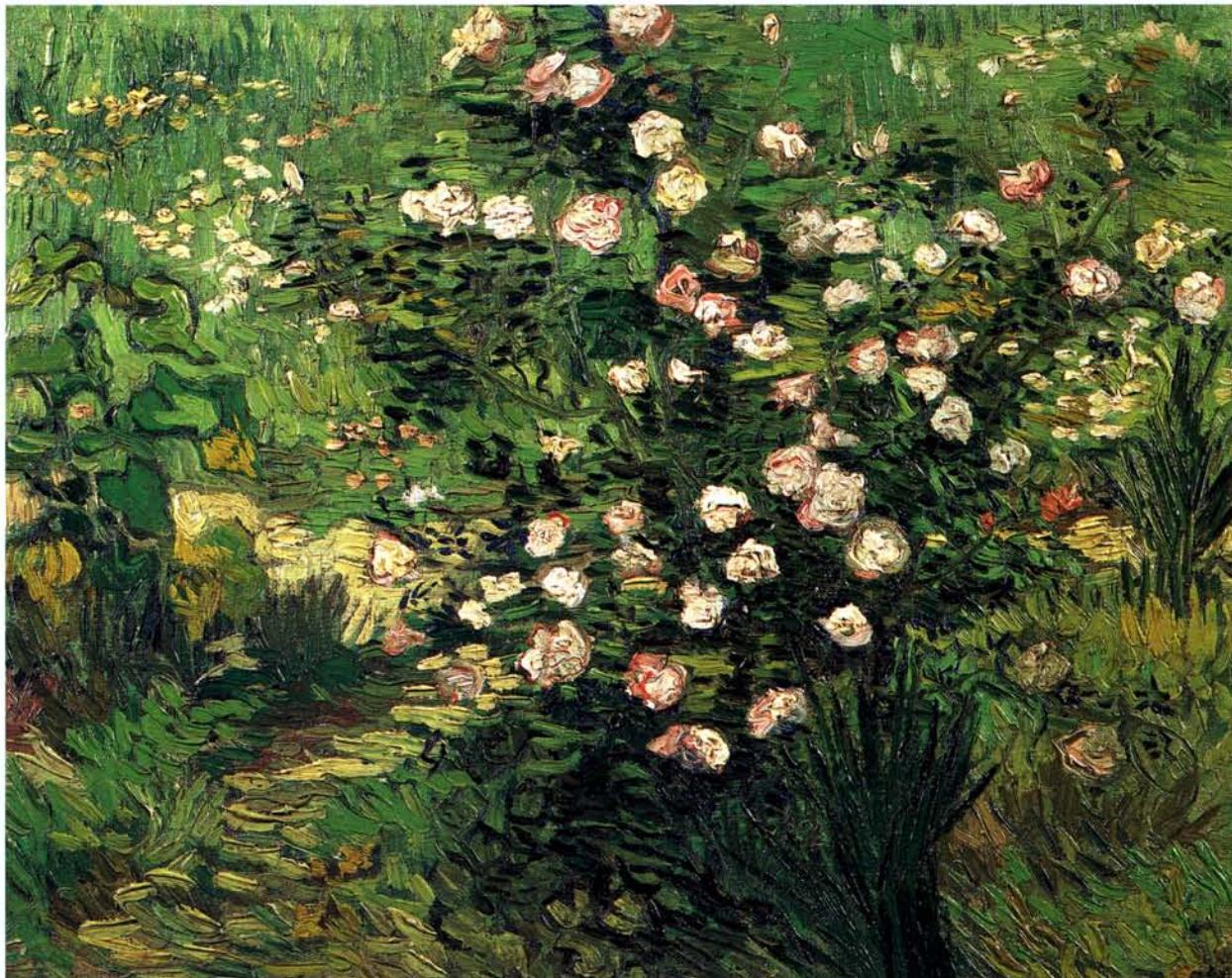
秋の気配もそこはかとなく感じるようになりました。いよいよ、9月15日からの全館オープンに伴い特別展「クロード・ロランと理想風景」を開催いたします。落ち着いた風情のなか、斬新な空間や美しい風景画を心ゆくまで堪能いただけるものと思います。 (末)



ウジェーヌ・ドラクロワ  
(1798-1863)

《聖母の教育》  
1852年  
油彩・カンヴァス 46×55.5cm

1842年、ドラクロワはノアンにあった、当代随一の女流作家ジョルジュ・サントの邸に招かれ、彼女が使っていた農婦とその娘をモデルにして《聖母の教育》(聖母マリアの母アンナがマリアに旧約聖書の読み方を教えていた場面)と題する油彩画を描いた。この作品はその10年後に同じ主題で描かれたもので、画面はひとまわり小さくなっているが、背景への関心が増し、また前景には犬の姿も加えられている。一般にドラクロワの作品といえば華麗な色彩と力強い動感に満ちたドラマティックな大作を連想し、またこうした作品にこそ彼の本領は遺憾なく發揮されたが、深い緑を主調として、全体に夜想曲のような静かな安らぎをたたえた本作品は、幅広い彼の芸術のまた別の一面を示している。



▷

フィンセント・ファン・ゴッホ  
(1853-1890)

《ばら》  
1889年  
油彩・カンヴァス 33×41.3cm

1889年12月、ゴッホはゴーガンとの諍いを発端として最初の発作におそれ、そしてほぼ半年後の1889年5月8日、サン=レミのカトリック精神療養院に入った。療養院の中に画室を与えられはしたものの、当初外出を禁じられていたゴッホの制作は、ほぼ1ヶ月の間療養院の中とその庭に限られることになる。この時期の弟テオ宛の手紙からは、彼が同時に複数のカンヴァスに向かい、庭に見られる植物を描いていたことが分かる。その中にはばらの名は記されていないが、かつてはアルル時代の最後に位置づけられていたこの作品も、療養院の庭を描いた一連の作品に属するものである可能性が指摘されている。ゴッホには花瓶の切り花ではなく自然の中の花をクローズアップして描いた作品があり、日本の花鳥画の影響が指摘されるが、この作品も、庭の風景と言うよりはばらの木そのものを描いており、そのような系譜の中に位置づけることができよう。



クロード・ロラン

黄金の子牛の礼拝を伴う風景

1660年

油彩・カンヴァス

114.5×158.5cm

マン彻スター市立美術館

「イタリアの光—クロード・ロランと理想風景」展  
出品作品

● 誌名について

「ZEPHYROS」(ゼフェロス)はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。



ZEPHYROS 第4号  
印刷発行日 平成10年9月7日 (年2回発行)  
編集 国立西洋美術館  
印刷 株式会社 稲元印刷  
発行者 財団法人 西洋美術振興財団  
〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7  
国立西洋美術館内  
TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135